

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 27 日現在

機関番号：32644

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22790493

研究課題名(和文) ナラティブ・ワークショップによる医師と患者教育 - 糖尿病の支援ツールの開発

研究課題名(英文) Educational programs for both patients and doctors using narrative approach - development of a tool for diabetes management -

研究代表者

山田 千積 (YAMADA, Chizumi)

東海大学・医学部・講師

研究者番号：40464226

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)：「当事者」である患者の視点やナラティブ(語り)を取り入れた、医師・患者教育のプログラムを提案することを目的とした。医師と患者は、並ぶ関係をつくり、媒介(ミディアム)を介して語りを共同生成した。従来の対面での会話(二項関係)よりも、医師と患者のあいだにミディアムを配置した方が(三項関係)、ナラティブ生成が行われやすく、その媒介項はヴィジュアル的なものがより効果的であった。個人のナラティブ・データを解析することにより、その患者個人に適した患者支援に役立てられた。今後、さらに個々の質的データからより一般的に適用可能なモデルを抽出し、より質の高い心理医療支援のコミュニケーション・モデルを提案する。

研究成果の概要(英文)：The objective of this study is to propose educational programs for both patients and doctors using narrative approach, which can facilitate looking at things from the other person's perspective and bridging the differences in their experiences and feelings. Narrative approach was based on the dialogical relationship between self and other. The ability to generate narrative was better when triadic relationship was incorporated as a mediator between self and other and when visual tools were utilized as mediators. Analysis of individual narrative data served as personal support for each patients. Moreover, integrated analysis of individual qualitative data are expected to establish generally applicable communication model for psychological and medical support at a higher level of quality.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：境界医学・医療社会学

キーワード：糖尿病 ナラティブ セルフマネジメント 心理医療支援 コミュニケーション・モデル

1. 研究開始当初の背景

(1) 糖尿病治療における患者教育の必要性：糖尿病の発症や増悪には、食事や運動など個人の生活習慣が密接に関連している。ひとたび糖尿病を患うことで、これまでの生活習慣の大幅な変更を余儀なくされ、治療への能動的な取り組みを期待される。長期的に良好な血糖コントロールを維持するためには、食事療法、運動療法、インスリン自己注射など、患者自身による実践が欠かせず、糖尿病治療では患者教育が重要であり、治療の一部として必要であると考えられてきた。

(2) 「指導」から「患者主体」の教育へ：1980年代の患者教育は、医師による「指導」や「知識」の伝達が強調されており、治療者と患者という二者の対面的関係が重視されていた。しかし、1990年代半ば以降、「患者主体」の教育へとパラダイム転換が起っている。これは糖尿病患者教育に動機づけを含んだ心理学理論の知見が応用されるようになってきたこととも関係している(Jacobson)。集団システム・カウンセリングや患者間のピア・カウンセリングなどがセルフエフィカシーを高めるアプローチとして注目され、自己決定感覚を高めるための働きかけを加えることによって、糖尿病患者の内発的動機づけを高め、患者自身の自由意志で選択した行動変容は維持されやすいことが知られてきている。

(3) ナラティブ・アプローチの有用性：「ナラティブ・アプローチ」は、語りの相互行為による生成プロセスや文脈を重視し、当事者からみた物語(経験の組織化の仕方や意味づけ方)を重視する(Bruner)。ナラティブ・ターン(物語的転回)と呼ばれ、21世紀に学横断的な大きな研究潮流になった(Denzin & Lincoln)。臨床治療や支援方法としては、医師からみた「疾患」に対して患者からみた「病いの語り(Kleinman)」、ナラティブ・セラピー(White & Epsom)による物語の書き換え、「ナラティブ・ベイスト・メディスン」(Greenhalgh & Hurwitz)など応用範囲が広い。

(4) 医師も患者も共に支援・教育が必要：従来の医療では、医師も患者も孤立し、それぞれが苦闘してきた。経験者と新参者のコミュニケーションも十分ではない。医療をよくするには、「医師も患者も、共に支援・教育する」ことが必要である。

2. 研究の目的

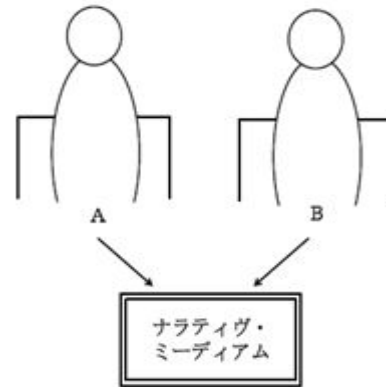
「当事者」である患者の視点やナラティブ(語り)を取り入れ、医師も患者も支援できる、当事者の経験を生かした医師・患者教育のプログラムを具体的に提案することを目的とする。

3. 研究の方法

糖尿病関連検査や生活習慣調査の結果(いずれも日常診療の範囲内で行われている検査)を媒介として、治療者と患者が話し合う。インタビュー調査は、インタビューガイドに従って行い(所要時間約30分)、ICレコーダーに記録して質的データ(言語記録)を作成し、それを解析した。

4. 研究成果

(1) 下図は、本研究のモデル(三項関係ナラティブのモデル)である。



治療者(A)と患者(B)は、並ぶ関係をつくり、媒介(ミーディアム)を介して語りを共同生成した。従来の医師と患者との対面での会話(二項関係)よりも、医師と患者のあいだにミーディアムを配置した方が(三項関係)、ナラティブ生成が行われやすく、その媒介項はヴィジュアル的なものがより効果的であった。これまでは、糖尿病治療に役立てられる情報としては、1日数回の自己血糖測定値や診察時のHbA1c値といった、「点」のデータしか得られなかった。しかし、最近の機器の進歩により、持続血糖モニタリングにより血糖変動がヴィジュアル的にグラフ化された「線」として得られ、ライフコーダと呼ばれる生活習慣記録機により1日の身体活動パターンや消費カロリーの日別推移グラフが得られるようになっている。これらのヴィジュアル・データは、医師が糖尿病の薬物治療に役立てることには使用されているが、それを媒介として語りを共同生成し、糖尿病患者教育に役立てた研究はこれまでにない。

(2) 個人のナラティブ・データを解析することにより、その患者個人に適した、いわゆるテーラーメイドの患者支援に役立てられた。今後、さらに個々の質的データからより一般的に適用可能なモデルを抽出し、理論的・方法論的検討を加えて、より質の高い心理医療支援のコミュニケーション・モデルを提案することを目指す。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 9件)

Yamada C, Kondo M, Kikuchi M, Matsushima M, Motegi M, Kubo A, Ishii N, Nishizaki Y. An approach to providing supplement advice in health evaluation and promotion - Including experiences from our anti-aging health check-up system -. Health Evaluation and Promotion. 2013; 40(4): 482-487、査読有

高松千織、近藤真澄、山田千穂。一人暮らしの高齢者患者への支援。臨床看護 39(8):1104-1109, 2013、査読有

Yamada C, Moriyama K, Takahashi E. Self-rated health as a comprehensive indicator of lifestyle-related health status. Environ Health Prev Med. 2012 17(6):457-462、査読有

Yamada C, Moriyama K, Takahashi E. Association between insulin resistance and metabolic syndrome risk factors in Japanese. J Diabetes Invest. 3(2): 185-190, 2012、査読有

Yamada C, Moriyama K, Takahashi E. Optimal cut-off point for homeostasis model assessment of insulin resistance to discriminate metabolic syndrome in non-diabetic Japanese subjects. J Diabetes Invest. 2012 3(4) 384-387、査読有

Yamada C, Mitsuhashi T, Hiratsuka N, Inabe F, Araida N, Takahashi E. Impact of Insufficient Insulin Secretion on Subclinical Glucose Dysregulation. Ningen Dock 25; 37-44, 2011、査読有

Yamada C, Mitsuhashi T, Hiratsuka N, Inabe F, Araida N, Takahashi E. Determination of Optimal Cut-off Points for Obesity-related Measures of Metabolic Syndrome Based on Insulin Resistance. Ningen Dock 25; 53-59, 2011、査読有

C, Mitsuhashi T, Hiratsuka N, Inabe F, Araida N, Takahashi E. Optimal reference interval for homeostasis model assessment of insulin resistance (HOMA-IR) in a Japanese population. J Diabetes Invest. 2(5): 373-376, 2011、査読有

山田千穂・稲辺富実代・三橋敏武・平塚伸・新井田奈美・高橋英孝。メタボリックシンドローム診断および重症化の指標としての肝機能検査。人間ドック 26(1): 29-36, 2011、査読有

〔学会発表〕(計 10件)

やまだようこ、山田千穂 「私と病い」のビジュアル・ナラティブ(1) 糖尿病患者

者のライフストーリー第 25 回日本発達心理学会、京都大学、2014 年 3 月 21 日
菅波澄治・やまだようこ・山田千穂 「私と病い」のビジュアル・ナラティブ(2) 腎臓病患者のライフストーリー 第 25 回日本発達心理学会、京都大学、2014 年 3 月 21 日

山田千穂、近藤真澄、菊池真大、内藤公敏、苜口隆重、長井陽子、柴田健雄、今西規、石井直明、西崎泰弘 内臓脂肪量と生活習慣病、アディポサイトカイン、炎症、動脈硬化との関連 日本総合健診医学会 第 42 回大会、東京：ホテルニューオータニ、2014 年 1 月 31 日

近藤真澄、山田千穂、高松千織、西崎泰弘、木村守次、豊田雅夫、深川雅史、自己血糖測定器の機種間差が CGM データに与える影響 第 51 回日本糖尿病学会関東甲信越地方会、パシフィコ横浜、2014 年 1 月 18 日

高松千織、山田千穂、近藤真澄、西崎泰弘、木村守次、豊田雅夫、深川雅史 自己血糖測定値の理解と利用に関する意識調査 第 51 回日本糖尿病学会関東甲信越地方会、パシフィコ横浜、2014 年 1 月 18 日

山田千穂、近藤真澄、塩澤宏和、内藤公敏、苜口隆重、長井陽子、柴田健雄、今西規、石井直明、西崎泰弘。体組成と血中アミノ酸濃度、脂肪酸濃度との関連 第 17 回 日本病態栄養学会年次学術集会、大阪国際会議場、2014 年 1 月 12 日

山田千穂・根上昌子・大塚博紀・鶴ヶ野しのぶ・近藤智雄・新井田奈美・平塚伸・三橋敏武・護山健悟・高橋英孝。インスリン抵抗性を中心にしたメタボリックシンドロームの脂質異常。第 46 回日本成人病(生活習慣病)学会学術集会。都市センターホテル、2012 年 1 月 15 日

山田千穂・三橋敏武・平塚伸・稲辺富実代・新井田奈美・野口直美、高橋英孝。人間ドック受診者における主観的健康感と身体的な健康指標との関連。第 69 回日本公衆衛生学会総会。東京国際フォーラム、2010 年 10 月 27 日

山田千穂・野口直美・新井田奈美・三橋敏武・平塚伸・稲辺富実代・高橋英孝。肥満を重視したメタボリックシンドローム診断の試み。第 31 回 日本肥満学会。前橋元気プラザ、2010 年 10 月 2 日

山田千穂・野口直美・新井田奈美・稲辺富実代・三橋敏武・平塚伸・高橋英孝。人間ドック受診者における Disposition Index の有用性。第 51 回 日本人間ドック学会学術大会。旭川グランドホテル、2010 年 8 月 26 日

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕(計 0件)

〔その他〕特になし

6．研究組織

(1)研究代表者

山田 千積 (YAMADA, Chizumi)
東海大学・医学部・講師
研究者番号：40464226